



The University of Human Environments Academic Repository

学位の種類	博士(看護学)
報告番号	甲第4号
学位記番号	看博第4号
氏名	井上 里恵
授与年月日	平成 31年 3月 14日
学位論文題目	病院に勤務する皮膚・排泄ケア認定看護師が訪問看護師に行う遠隔支援の有用性
審査委員	主査:藤原 奈佳子 副査:島内 節、安藤 純子

論文内容の要旨

I. 研究の背景

地域包括ケアシステムの推進において、訪問看護の質を充実することは喫緊の課題である。しかし、訪問看護の利用者は重症化・多様化・複雑化しており、訪問看護師は在宅ケアにおいて、困難を生じていることが報告されている。一方、看護ケアの質向上を役割とする認定看護師の92.5%は病院に勤務している。認定看護師が病院に居ながら ICT を活用して遠隔で訪問看護師を支援することにより、訪問看護師のケアの質を補完し訪問看護の質向上に貢献できると考えた。

II. 研究目的

病院に勤務する皮膚・排泄ケア認定看護師 (Certified Nurses in Wound, Ostomy and Continence Nursing:以下 WOCN)が、遠隔で訪問看護師に対する支援(以下、遠隔看護支援)を行うことにより、訪問看護師が利用者に行うケアの質を補完し、訪問看護の質向上につながることを検証する。

III. 研究方法と結果

本研究の仮説を(1)訪問看護師は、ケア実践場面において困難を感じており認定看護師の支援を求めている、(2)WOCN が訪問看護師に対して遠隔看護支援を行うことにより、知識・アセスメント・ケア方法等の困難が改善・解決する、(3)WOCNから遠隔看護支援を受けることによって訪問看護師は新たな知識やケア方法の習得ができる、として 3 段階で実施した。これらの結果より、Donabedian モデルに沿って遠隔看護支援の質を評価し有用性について検証した。

1. Phase1

訪問看護師が在宅ケア実践場面で感じる困難と病院に勤務する認定看護師に対する支援ニーズに対する量的分析

1) 方法と対象

東海圏 3 県の訪問看護ステーションを無作為に抽出し、訪問看護師 1500 名を対象に郵送法による自記式質問紙調査を実施した。質問紙は、属性、直近一年間の在宅ケア実践場面で困難を感じた頻度と内容および解決方法、認定看護師への相談経験の有無、相談した認定看護師の所属施設および看護分野、認定看護師への支援ニーズの有無と認定看護分野から構成した。

記述統計とステップワイズ法(変数投入基準:投入 F 値 $>$ 2.00, 除去 F 値 $<$ 1.99)により、訪問看護師の困難要因を重回帰分析した(IBM SPSS Statistics ver. 23)。

2) 結果

質問紙調査の回収は 402 名(回収率 26.9%)であった。看護師経験年数は、19.1 年(±8.7 年)、訪問看護経験年数 4.9 年(±5.0 年)であった、ステーションに認定看護師が在籍しているのは 27 名(6.7%)であった。

訪問看護師の 95.3%は直近1年間のケア実践場面で「利用者の状態のアセスメント」、「具体的なケアの方法」、「疾患に関する知識」などの困難を感じていた(複数回答)。困難に対しては他者

に相談しながら解決していたが、79.3%が認定看護師からの支援を求めており、仮説 1 を支持した。支援ニーズの高い認定看護分野は、「皮膚・排泄ケア」、「緩和ケア」、「摂食・嚥下障害看護」であった(複数回答)。「看護師経験年数」、「訪問看護経験年数」、「ステーション所在地」、「認定看護師の所属の有無」を困難要因の独立変数として重回帰分析を行ったところ、「看護師経験年数」が抽出されたが自由度調整済み R² 係数は 0.009 であり困難要因を説明するには十分ではなかった。

2. Phase2

訪問看護師と WOCN による遠隔看護支援の準実験研究

1) 方法と対象

病院に勤務する認定看護師を WOCN に限定し、WOCN3 名、訪問看護師 4 名、利用者 4 名およびその家族を対象とした。訪問看護師と WOCN はタブレット端末に Skype 機能を設定し、事前に利用者に関する最小限の情報共有を行った。訪問看護師は利用者宅で WOCN に遠隔で相談しながらケア提供を行った。調査内容は、WOCN 回答の「遠隔看護支援実施記録」、訪問看護師回答の「支援ニーズ解決度記録」、利用者回答の「利用者満足度」として事例ごとに記述処理を行った。支援ニーズ解決度の測定は、中谷ほか(1999)の手法を参考に、解決(支援ニーズが消失した状態)4 点、改善(支援ニーズは残っているが状態は良くなった状態)3 点、維持(以前と比べ変化がない状態)2 点、悪化(状況が低下、悪い方向へ変化した状態)1 点と判定する自作の評価表を用いた。利用者満足度は、立森・伊藤(1999)の日本語版利用者満足度 8 項目版(日本語版 Client Satisfaction Questionnaire8 項目版:CSQ8-J)を使用した。8 項目からなり、「4 とてもよい」、「3 よい」、「2 まあまあよい」、「1 よくない」とする総得点 32 点で評価するものである。

2) 結果

訪問看護師の平均看護師経験年数は 15.7 年、平均訪問看護経験年数は 5.3 年、WOCN の平均看護師経験年数は 27 年、平均認定看護師経験年数は 16 年であった。利用者宅で 7 回(平均対話時間 15.8 分)、ステーション等に戻ったあとにメール機能等を利用して 10 回実施された(平均対話時間 35.4 分)。契約時間内に遠隔看護支援を実施するには限りがあり、利用者宅以外でメール機能等を用いてやり取りをする必要性が明らかになった。相談・支援内容は、皮膚の状態アセスメント、ケアの具体的方法等であり、すべて画像を活用していた。訪問看護師は、新たな知識やケア方法を習得しており仮説 3 が支持された。訪問看護師の支援ニーズ解決度は維持から解決(平均 2.8 点)であり、仮説 2 を支持した。加えて、家族との情報共有や思いの共有、家族の反応の確認などを遠隔でやりとりしていた。利用者満足度の回答が得られたのは 2 名であり、それぞれ 24 点、29 点であった。

3. Phase3

遠隔看護支援を体験した訪問看護師と WOCN によるインタビューの量的・質的分析

1) 方法と対象

Phase2 の協力者である訪問看護師 4 名と WOCN 3 名を対象とした。訪問看護師は個別インタビュー、WOCN はフォーカス・グループ・インタビュー(以下 FGI)を実施した。調査内容は、遠隔看

護支援を活用した内容、訪問看護師や WOCN のアセスメント、感じたこと、会話・画像のやりとりの安全性、人的資源活用、訪問看護の質への影響、遠隔看護支援システムの実現性とした。データは、テキストマイニング(NTT データ数理システム Text Mining Studio ver.6.0)による量的分析と内容分析を用いて分析した。逐語録の分析では、Krippendorff, K (2003)の内容分析手法を参考に一文を記録単位とした。

2) 結果

訪問看護師4名のインタビュー時間は 84 分 56 秒(平均 28 分 19 秒)、WOCN の FGI 時間は 89 分 30 秒、総合計時間は 174 分 26 秒であった。

テキストマイニングによるデータの基本情報は、延べ単語数 5415 個、単語種別数は名詞・動詞・副詞など 1479 個であった。単語頻度分析により、訪問看護師と WOCN それぞれのデータで出現頻度の上位 18 位までを確認したところ、「人」、「画像」、「今」などの共通する単語が出現していた。また、訪問看護師の語りからは、利用者本人ではなく介護者である「お母さん」や「奥さん」という単語が出現する特徴が見られた。

逐語録の文章数は、訪問看護師 447 文、WOCN450 文であった。訪問看護師の個別インタビューの逐語録は、7 カテゴリ、24 サブカテゴリ、136 コード、WOCN の FGI の逐語録は、7 カテゴリ、19 サブカテゴリ、82 コードに抽象化された。訪問看護師と WOCN の語りは【ICT の活用】、【判断の熟考】、【訪問看護師・WOCN ・家族の協働】、【看護実践の心理的サポートと呼応】、【WOCN の補完による訪問看護実践の変化】、【遠隔看護支援の利点】、【遠隔看護支援の課題】という共通した 7 つのカテゴリに導き出され、さらには遠隔看護支援によるケアの過程と遠隔看護支援の実現性という 2 つのテーマで構成された。

IV. 考察

訪問看護師は、在宅ケア実践場面で困難を感じており、認定看護師からの支援を求めている。遠隔看護支援によって、訪問看護師は WOCN から新たな知識の獲得やケア方法の習得に限らず、アセスメントを深め「安心」や「自信」につながっていた。遠隔看護支援は、その場に居合わせる同行訪問に近い成果を生み出し、訪問看護の質向上に有用であることが検証された。さらに、WOCN から訪問看護師への一方向の支援でなく、WOCN 自身の深いアセスメントや責任を生み出し、相互補完の関係が成り立っていた。遠隔であっても訪問看護師・利用者および家族、WOCN は協働するチームとして存在し得ることが明らかになった。しかし、遠隔看護支援の導入にあたっては、初回訪問からではなく訪問看護師と利用者および家族との関係性が構築できたうえで開始することが望ましいことがわかった。

遠隔看護支援は、時間の効率化、活動範囲の拡大など病院に勤務する WOCN の効率的な人的資源活用が期待できる。システム構築と運用については、病院やステーション等の理解と機器に係る資金、WOCN が地域活動を行う基準づくりの必要性が示唆された。

V. 本研究の新規性・独創性・学術的価値

病院に勤務する WOCN が行う遠隔看護支援は、訪問看護師が行うケアの質向上に留まらず、安心と自信につながることで、WOCN・訪問看護師・利用者(家族)はチームとして存在すること、

WOCN と訪問看護師の相互補完関係が成立したことは新たな知見である。また、訪問看護師のニーズ調査を実施した上で、準実験研究と体験者のインタビューを統合して遠隔看護支援の有用性を検証したことは独創性がある。WOCN に限らず専門看護師や認定看護師が訪問看護師への遠隔看護支援を行うシステムづくりの一助となり、学術的・社会的価値は高い。

VI. 研究の限界と今後の課題

準実験研究は 17 回のみを検証であること、病院に勤務する認定看護師を WOCN に限定して実施したことから、遠隔看護支援の内容やケアの補完内容が限局していることが考えられる。今後は、遠隔看護支援の看護分野を拡大して検証する必要がある。

VII. 結語

WOCN による遠隔看護支援は、訪問看護師が実践するケアの補完と「安心」や「自信」につながり、訪問看護の質向上の有用性が検証された。加えて遠隔看護支援は、WOCN から訪問看護師への一方向ではない相互補完関係が成立し、WOCN・訪問看護師・利用者(家族)は、遠隔であってもチームとして存在した。

遠隔看護支援のシステム構築と運用については、施設の理解、機器運用資金、活動基準づくりが必要である。

論文審査の結果の要旨

本論文における研究の着眼は、在院日数短縮による在宅療養者の重症化・多様化・複雑化の中で、病院に勤務する認定看護師の人的資源活用であった。そこで本研究は、病院に勤務する皮膚・排泄ケア認定看護師(Certified Nurses in Wound, Ostomy and Continence Nursing:以下 WOCN)が、情報通信技術(ICT)を活用して遠隔で訪問看護師に対する支援を行うことにより、利用者に実施するケアの質を補完し訪問看護の質向上につながることを検証することを目的とした。研究仮説を、(1)訪問看護師は、ケア実践場面で困難を感じており、認定看護師の支援を求めている；(2)WOCN が訪問看護師に対して遠隔看護支援を行うことにより、知識・アセスメント・ケア方法等の困難が改善・解決する；(3)WOCN から遠隔看護支援を受けることによって訪問看護師は新たな知識やケア方法の習得ができるとした。これらの仮説を検証するために、次の3段階で研究を進めている。第1段階では、訪問看護師が在宅ケア実践場面で感じる困難と病院に勤務する認定看護師に対する支援ニーズなどを調べるための質問紙調査を実施し、402名の回答から、訪問看護師の95.3%はケア実践場面で困難を感じていることを把握した。第2段階では、病院に勤務する認定看護師としてWOCN3名、訪問看護師4名、利用者4名およびその家族を対象として、訪問看護師とWOCN がタブレット端末でSkype機能を利用した準実験研究で17回の遠隔看護支援について分析し、訪問看護師の支援ニーズ解決度は「維持」から「解決」のレベルであった。第3段階では、遠隔看護支援を体験した訪問看護師とWOCN の「語り」から【ICTの活用】、【判断の熟考】、【訪問看護師・WOCN・家族の協働】、【看護実践の心理的サポートと呼応】、【WOCNの補完による訪問看護実践の変化】、【遠隔看護支援の利点】、【遠隔看護支援の課題】の7つのカテゴリーを抽出した。

これらの研究結果から、Donabedianモデルに沿って遠隔看護支援の質評価を統合できており、WOCNが病院に滞在しながら、訪問看護師に行う遠隔看護支援の有用性について十分な検証がされている。

本論文は、各段階の研究結果から、論理的な考察と結論が導かれ、論旨が一貫している。病院に勤務するWOCNが訪問看護師に対して行う遠隔看護支援は、訪問看護師の「ケアの補完」に留まらず、訪問看護師の「安心感」と「自信」につながることで、遠隔でのWOCN・訪問看護師・利用者(家族)は「チームとして存在」したこと、WOCNと訪問看護師の「相互補完関係」が成立したこと、などは新たな知見で新規性がある。また、訪問看護師のニーズ調査を実施した上で、準実験研究と体験者のインタビューを統合して遠隔看護支援の有用性を検証したことには独創性がある。さらに、WOCNに限らず専門看護師や認定看護師が訪問看護師への遠隔看護支援を行うシステム構築の一助となり、学術的・社会的価値は高い。

以上より、本論文は本学の学位授与要件に則り、博士(看護学)の学位授与に値するものと判断した。

平成 31年 2月 5日

論文審査委員 主査 教授 藤原 奈佳子
副査 教授 島内 節
副査 教授 安藤 純子